

小学生はどれだけの語彙を知っていればよいのか？ —使用教材におけるカバー率の観点から—

How Many Words Do Elementary School Students Have to Know? : From the Perspectives of Coverage of Textbooks

佐藤 剛*・秋田谷桃花**・芦田 七海**

Tsuyoshi SATO*・Momoka AKITAYA**・Nanami ASHITA**

川元 青空**・古川 遼**・丹藤 慧也**

Sora KAWAMOTO**・Ryo KOGAWA**・Keiya TANDO**

要 旨

本研究は、小学校において2020年度から教科として外国語が指導されることに伴い、指導すべき語彙を、使用されている教材のカバー率の観点から量的に明らかにすることを目的としたものである。小学校で主たる教材として使用されている中学年向けの *Let's Try! 1, Let's Try! 2*, 高学年向けの *We Can! 1, We Can! 2* と中学校1年生の検定教科書である *TOTAL ENGLISH 1*（学校図書）と *NEW CROWN ENGLISH COURSE 1*（三省堂）の本文および教師用指導書に見られる、教師や児童の発話例などをテキストデータ化し、*AntWordProfiler* を使用して、佐藤（2018）の小学生のための受容語彙リストの200語レベル、400語レベル、600語レベル、800語レベルのリストに含まれている語彙が、それぞれの教材のどれくらいをカバーしているのかを分析した。その結果、カバー率は200語レベルではおよそ60%～70%、400語レベルでは10%程度、600語レベルでは3%～5%、800語レベルでは1%程度と、小学校中学年用の教材から中学校1年生用の教材を通して同様の結果を得た。

キーワード：小学校英語教育 教材分析 語彙指導

1 はじめに

2020年度（令和2年度）からの新学習指導要領の全面実施により、小学校5・6年生において外国語が教科化され、小学校3・4年生においても外国語活動が開始される。特に、語彙指導については、小学校の3年から6年生の4年間において600から700語を扱い、中学校3年間では小学校で学んだ語に加えて、1,600から1,800語を扱うことが示され、指導する語彙数が大幅に増加した。このように、新学習指導要領では小学校3年生から中学校3年生までの7年間にわたる、より系統的な語彙指導が求められている。

英語の授業において指導される項目の中でも、語彙は長期的、継続的に学習する必要がある項目である。本研究では、新学習指導要領による、小学校から中学

校で指導する語彙数の増加を受けて、英語学習における望ましい小中連携の在り方を模索し、使用教材における語彙カバー率の観点から小学生はどれだけの語彙を知っていればよいかを検討する。

佐藤（2018）では *Hi, Friends!* と中学校の教科書において語彙的比較を行った。これを受けて、本研究では佐藤（2018）で扱われなかった、小学校で主たる教材として使用されている中学年向けの *Let's Try! 1, Let's Try! 2*, 高学年向けの *We Can! 1, We Can! 2* と中学校1年生の検定教科書である *TOTAL ENGLISH 1*（学校図書）と *NEW CROWN ENGLISH COURSE 1*（三省堂）における、佐藤（2018）の小学生のための受容語彙リストのカバー率を算出し、小学生に指導すべき語彙を量的に検討する。

* 弘前大学教育学部

Department of English Education, Faculty of Education, Hirosaki University

** 弘前大学教育学部学校教育教員養成課程

Teacher Training Division, Faculty of Education, Hirosaki University

2 先行研究

語彙のカバー率を調査する研究はこれまで多く行われてきた。それは、英語を理解するためには、どれくらいの語彙サイズが必要となるのかという点に大きく関係があるためである。投野 (2019) は、学習すべき語彙の区別をつけるにあたって、その使用率に基づく有用度を挙げている。その根拠として、British National Corpus の上位2,000語に含まれる語彙と比較して、それ以下のセットでは、使用率が極端に落ちてしまい、4,000語レベルの語彙を記憶しても、それでカバーできる英文の割合は、5%程度しか増加しないことを指摘している。基礎的な学習者が目標とする語彙サイズは、2,000語を使えるようにすることであると結論付けている。

長谷川、中條、西垣 (2010) は、「役に立たない」と批判される英語教育の問題点について、英語教育の専門家の見解をまとめ、「語彙」の指導と学習に関して、英語教育の改善につながる方向性を検討した。その結果、出現頻度の高い語彙をある一定数 (2,500語から3,000語の範囲)、できるだけ素早く覚え、その後は関心の分野での単語を徐々に増やしていく外国語学習が「使える英語」につながると指摘した。

上記のように、成人外国語学習者にとって必要とされる語彙サイズは3,000語程度とされるのが一般的である。投野 (2019) および長谷川、中條、西垣 (2010) は、成人学習者の言語データを分析したものであるが、中学校用の教材を対象とした研究としては、以下のようなものが挙げられる。三浦 (1984) は、中学校用英語教科書 5 種類15冊を語彙の点から概観したが、内容的にみて、5種類の教科書の共通語は20%足らずで、1種類にしか出て来ないものが割合に多いことを明らかにした。意味分野別、用法別に語彙を検討すると、教科書に欠如している語が際限なく浮んでくるのであるが、制約の多い教科書では当然、欠如が起こることはやむを得ない。不必要という判断である語を除去すると、結果的に欠落していたのでは大きな相違がある。そのため指導する教員は、学習者の身の周りの単語を教材以外の面でカバーする工夫が必要である。

眞野、鈴江 (2018) は現行の中学校英語教科書 (18冊) における動詞に関して調査を行った。全教科書において動詞の延べ語数は約2,797~4,134語の間であり、異なり語数は、218~252語の範囲であった。学習指導要領で指導すべき目安とされている語彙数である

1,200語から見ると、その5分の1程度が動詞によって占められている。高頻度語は教科書間で類似しており、上位10位の語を教科書間で比較すると、6つの動詞 (be, have, like, play, go, see) がすべての教科書に含まれていた。全教科書で共通して出現する語は125語で、半数弱の動詞はばらつきがみられる。学習者の効率的な語彙の習得のために、教科書語彙の「品質管理」を行うことや、教員・教科書会社・大学などの研究機関の連携が必要となると述べている。

一方で、小学生を対象とした語彙の研究としては、佐治・佐伯 (2012) が挙げられる。この研究においては、小学校6年生の英語語彙に対する親密性が語彙理解度にどのような影響を及ぼしているかについて明らかにした。カタカナ語表記が存在する英語語彙は単語への親密性が高く、また、単語親密性とリスニング能力、またスピーキング能力との間に弱い正の相関がみられた。この結果から、語彙への親密性を高めることがリスニング能力、及びスピーキング能力の向上に寄与することが考えられる。

また、岩崎・作井 (2018) では、英語教育の早期化、小学校における英語の教科化の導入を受けて、小中連携の重要性を示唆し、中学校検定教科書6冊の教科書分析を行い、小中連携がどのように実践されてきているかを検証した。具体的には、Unit1の前にある小学校外国語活動の復習と中学校英語授業へ円滑に接続することを目的とした課、いわゆる「Unit0」についての外的分析と内的分析を行い各教科書の特徴をまとめ、小中連携の在り方について考察した。その結果、ほとんどの教科書の「Unit0」では小学校外国語を基軸においており、単語やアルファベットを聞いてわかるレベルを超えることを目標としており、小学校外国語と中学校英語を円滑に結びつけるためには、小学校で知っておくべき語彙をカバーする必要があると考えた。

小学校の外国語については、語彙の研究分野に限らず、指導・研究どちらの面についてもその歴史が浅く、実証研究や学習教材を量的に分析した研究やその結果に基づく実践は、ほとんど行われていない。そのため、本研究においては、小学校の外国語活動及び外国語の授業において指導すべき語彙を、以下に示す手法によって教材のカバー率という点から明らかにすることを目的とするものである。

3 リサーチクエスチョン

本研究は、小学校の外国語活動において、主な教材として使用されている *Let's Try!*, *We Can!* と中学校の検定教科書を、佐藤 (2018) の『小学生のための受容語彙リスト』を用いて比較・分析し、小学生に対する語彙指導の在り方と小・中学校のスムーズな連携の在り方を語彙の面から考察するものである。そのため、以下の3つのリサーチクエスチョン (RQs) を設定した。

- RQ1 小学校の語彙リストが、*Let's Try!*, *We Can!*, 中学校1年生用の検定教科書に占めるカバー率はそれぞれどのくらいか。
- RQ2 それぞれの教材におけるレベル別の高頻度語彙にはどのような特徴がみられるか。
- RQ3 それぞれの教科書には載っているが、リストにはない語彙にはどのような特徴がみられるか。

4 研究方法

4.1 マテリアル

本研究で分析の対象とする教材は、小学校の外国語活動で使用されている、*Let's Try! 1 Let's Try! 2, We Can! 1 We Can! 2*, 中学校1年生用の現行の検定教科書である *TOTAL ENGLISH 1* (学校図書)、*NEW CROWN ENGLISH COURSE 1* (三省堂) である。小学校で使用されている教科書は、児童用テキストの全文、教師用指導書にある児童や教師の発話例を、中学校の教科書は本文のみを分析対象とした。さらに、カバー率の算出については語彙プロファイリングにおけるコーパス言語学の調査を実行する際に多くの研究によって広く使用されている *AntWordProfiler* を使用した。

4.2 実験手続き

上記4.1に挙げた教材における、『小学生のための受容語彙リスト』(佐藤, 2018) のカバー率を分析するにあたって、以下のような手続きを採用した。まず、小学校の外国語活動で使用されている、*Let's Try! 1, Let's Try! 2, We can! 1, We can! 2* においては、本文ならびに指導編のスク립トを、中学校1年生用の現行の検定教科書である *TOTAL ENGLISH 1* (学校図書)、*NEW CROWN ENGLISH COURSE 1* (三省堂) の本文を、テキストファイル (.txt) の形式でデータ化した。次に、より妥当な結果を得ることを目的とし

て、各データに、以下のようなスクリーニング作業を行った。

- 名詞の複数形 (dogs) は、単数形 (dog) として分析する。
- don't や can't のような短縮形は、do not ・ does not のように別々の語として分析する。
- 一般動詞の過去形の規則変化形 (played)、主語が三人称単数の際に s または es が付いた形 (plays)、現在分詞形 (playing) は原形 (play) として分析する。ただし swimming や reading など名詞化してしまっているものは、異なる1語として分析する。
- 人名 (Taku, Sakura, Jack) は分析対象のテキストから削除する。

最後に、*AntWordProfiler 1.4.0 for Windows* を使用し、佐藤 (2018) の『小学生のための受容語彙リスト』が、各データに出現する語彙に対してどの程度カバーできているか調査するために、200語レベル、400語レベル、600語レベル、800語レベル、リストにない語それぞれのカバー率と高頻度語彙を算出した。

4.3 データ分析

データ分析の手法は以下に示すとおりである。

まず、RQ1のための手立てとして、佐藤 (2018) が作成した小学生のための受容語彙リストを頻出度順で200語ごとにグループに分け、頻出度の高い順からそれぞれのグループを200語レベル、400語レベル、600語レベル、800語レベルとした。次にその語彙リストが、*Let's Try! 1, Let's Try! 2, We Can! 1, We Can! 2*, そして中学校の検定教科書に出現する語彙をどの程度網羅できているかを示すカバー率を算出し、それぞれのテキストの類似点や違いの傾向を比較・検討した。

次に、RQ2のための手立てとして、それぞれのグループごとにテキストの高頻度語彙上位10語を調査し、それぞれのテキストの特徴を比較・検討した。

最後に、RQ3のための手立てとして、それぞれのテキストの中で、佐藤 (2018) が作成した受容語彙リストの中には出現しない語彙の中から高頻度語彙10語を調査し、どのような違いや特徴があるのかを比較・検討した。

5 結果と考察

本研究は、小学校の外国語活動で使用されている、*Let's Try! 1, Let's Try! 2, We Can! 1, We Can! 2*, 中

学校1年生用の検定教科書である *TOTAL ENGLISH 1* (学校図書)、*NEW CROWN ENGLISH COURSE 1* (三省堂) における、佐藤 (2018) の小学生のための受容語彙リストのカバー率を200語レベル、400語レベル、600語レベル、800語レベル別に算出することで、小学生に指導すべき語彙を量的に明らかにするものである。それぞれの教材におけるカバー率及び、リストに見られなかった語彙は以下に示す通りとなった。

5.1 *Let's Try! 1* におけるカバー率

表1は、小学生のための受容語彙リストの *Let's Try! 1* におけるカバー率を総語数と異なり語別に示したものである。

表1 小学生のための受容語彙リストのカバー率 (*Let's Try! 1*)

FILE	TOKEN	TOKEN% (累積)	TYPE	TYPE% (累積)
200LV	1,483	65.33 (65.33)	116	27.88 (27.88)
400LV	296	13.04 (78.37)	77	18.51 (46.39)
600LV	127	5.59 (83.96)	52	12.50 (58.89)
800LV	24	1.06 (85.02)	18	4.33 (63.22)
NLV	340	14.95 (100)	153	36.78 (100)

Note: Token = 総語数、Type = 異なり語、NLV = リストにない語

表1に見られるように、*Let's Try! 1* の出現語彙のカバー率は、それぞれ200語レベルでは65.33%、400語レベルでは13.04%、600語レベルでは5.95%、800語レベルでは1.06%、リストに見られない語の割合は14.95%だった。これは、200語レベルの語彙を習得していれば *Let's Try! 1* に現れるおよそ6割の語彙の意味を理解することができ、リストにある800語全ての語彙を習得していれば、8割程度の語彙を理解することができるということである。

また、総語数では200語レベルが6割をカバーしているのに対して、それ以上のレベルが13.04%~1.06%のカバー率と極端に下がっている。異なり語数のカバー率が総語数のカバー率と比較して下がり方が緩やかであることから、200語レベルの語彙は、テキスト内に何度も繰り返し出現しているといえる。これは、200語に含まれる語彙は非常に汎用性が高い重要な語彙であることが原因であるが、それに加えて、小学校の授業においては、同じ文型の一部を変えて、繰り返して何度も練習する形式の活動が多くみられることにも起因していると考えられる。

次に、200語レベルから800語レベルまで、それぞれ

の語彙リストに含まれる語彙の中で、*Let's Try! 1* の中で、高頻度に使われる語彙について検討する。200語レベルの語彙リストの中の高頻度語彙は、Iやyou, doなど10語中7語が機能語であった。これは、表1の総語数のカバー率が関係していると考察できる。200語レベルでは、総語数のカバー率が65.33%と6割を超える高い数値を示している。それにも関わらず、異なり語数のカバー率は、27.88%とさほど高くない。この理由として、機能語は、文の内容に関わらず同じ語が繰り返し使われているため、総語数での割合が、異なり語数での割合よりも高い結果となったのだと考えられる。このことから、200語レベルの総語数で高い割合を占めていたのは、機能語が多くを占めていることが大きく関係しているといえる。また、likeが200語レベルの高頻度語彙第3位にいるのは、*Let's Try! 1* で扱われる表現が関係していると考えられる。*Let's Try! 1* は、自分の好きなものやものの数を数えるなど、児童にとって身の回りの事象を題材としている。そのため、自分の好きなことやものについて伝えるための動詞である like が高頻度動詞として挙げられたと考えられる。

400語レベルの語彙リストの中の高頻度語彙は、blue, red, green など、色を表す名詞・形容詞が主に出現している。これは、*Let's Try! 1* の Unit 4で色を扱っているということが主な要因として考えられる。また、この他にも Unit 5の好きな色を聞く単元や、Unit 7で好きな色や形を組み合わせてカードを作る単元など色を表す単語は多く *Let's Try! 1* で使われているため、高頻度語彙として出現している。色は、ものを説明する際によく使われる。まだ持っている語彙が少ない初期学習者にとって、ものを説明するために必要な形容詞を知っていると、教員が新出語彙を児童に教える際に、教えやすく、学習を円滑にすることができるが、頻度の高さに反映されたのではないだろうか。

600語レベルの中の高頻度語彙の中で、特徴的なのが、hint である。これは、小学校の授業ではゲームがよく行われることに起因していると考えられる。例えば、Unit 8ではクイズがアクティビティの中にあり、ヒントを出す場面が多くみられる。また、soccer や baseball, basketball のようなスポーツ名がこのグループに出てきたのは、好きなものを説明するときスポーツが主に用いられやすいことからこれが原因であろう。

800語レベルの語彙リストの中の高頻度語彙で最も

頻度が多かった idea は、“Good idea!”として、教員が児童をほめる際のクラスルームイングリッシュとして出現していた。英語絵本なども含めた佐藤 (2018) の語彙リストでは800語レベルであったが、*Let's Try! 1*では高頻度語彙として出現していたのは、クラスルームイングリッシュとしてという英語絵本などでは使われない用例で idea という語彙が使われていたからだと考えられる。

また、king や notebook、violin が *Let's Try! 1* で使われているのは、これらの語が外来語として日本語の中でも多く使用されることから、児童も耳にしたことのある身近な語彙であるからだと考えられる。外来語など慣れ親しみやすい語は児童にとって学習しやすい語であるため、*Let's Try! 1*においても広く使われているため高頻度で出現したものだと考えられる。

リストにない語での高頻度語彙第1位は swimming であった。*Let's Try! 1*では、swim はなく、swimming のみが出現している。swimming は swim の派生語であるが、スイミングは外来語として広く慣れ親しまれていることが、受容語彙リストにはない語の中で高頻度で *Let's Try! 1* に出現しているのだと考えられる。

5.2 *Let's Try! 2*におけるカバー率

表2は、小学生のための受容語彙リストの *Let's Try! 2*におけるカバー率を総語数と異なり語別に示したものである。

表2 小学生のための受容語彙リストのカバー率 (*Let's Try! 2*)

FILE	TOKEN	TOKEN% (累積)	TYPE	TYPE% (累積)
200LV	2,299	60.81 (60.81)	108	22.55 (22.55)
400LV	263	10.49 (71.3)	94	19.62 (42.17)
600LV	253	7.81 (79.11)	74	15.45 (57.62)
800LV	106	3.93 (83.04)	44	9.19 (66.81)
NLV	221	16.97 (100.01)	134	33.19 (100)

Note: Token = 総語数、Type = 異なり語、NLV = リストにない語

表2に見られるように、*Let's Try! 2*の出現語彙のカバー率は、それぞれ200語レベルでは、60.81%、400語レベルでは10.49%、600語レベルでは7.81%、800語レベルでは3.93%であり、リストに見られない語の割合は16.97%であった。これは、学習者が小学生のための受容語彙リストの200語レベルの語彙を習得していれば、小学4年生用の教科書である *Let's Try! 2*のおよそ6割の語彙を理解でき、リストにある800語す

べての語彙の意味を理解することができれば、8割程度の語彙を理解することができるということである。

また、*Let's Try! 1*と同様に、200語レベルの語彙のカバー率が60.81%であるのに対し、それ以上のレベルのカバー率は、10.49%~3.93%と、大きく下がっていることが分かる。さらに、異なり語のカバー率は、200語レベルでは、22.55%、400語レベルでは19.62%、600語レベルでは15.45%、800語レベルでは9.19%と、総語数のカバー率に比べ、下がり方が緩やかである。200語レベルの異なり語の種類が108語であることから、この108種類の語彙が *Let's Try! 2*においても繰り返し用いられていることが推測される。

そこで、200語レベルの高頻度語彙を算出すると、I, you, it などの機能語が多く挙げられる。200語レベルに頻出する機能語は、場面設定、文の内容に関わらず繰り返し使用されるものが多い。そのため、英語初期学習段階である小学校中学年の段階で、それらの音と意味の一致を確実に行うことで、英文は内容語と機能語で構成されていることの体感的な理解を促すことができ、中学校で、自ら文を構成する際に躓きにくくなると考えられる。

また、内容語で頻出度が多いものは、have や like 等の基本的な動詞であった。have は持ち物を尋ね合う単元やアルファベットで文字遊びをする単元で多く使用されている。like は、曜日や時間の言い方について学習するレッスンで、好きな曜日や時間を尋ね合う表現に使用されている。このように、have や like の意味の定着をメインにしている単元以外の単元でも多く使用されていることからどのような場面でも、使うことができる内容語が高頻度で使われているといえる。

以上から、*Let's Try! 2*を学習するにあたって、小学生のための受容語彙リストの200語レベルの語彙を十分に身につけることで、どのような場面設定にも対応でき、スムーズに次の学習段階へと進むことができると考えられる。

単元の内容によって、使用する場面が限られる高度な語彙が *Let's Try! 2*にもいくつか出現しているため、リストにない語として、221語が挙げられた。一方で、リストにない語の中でも数多く出現した語があり、次の2つの特徴が見られた。

リストにない語の中の高頻度語彙として、1つ目に、oh や wow などの感動詞が挙げられる。ほとんどの単元において広く使われているため、自然なコミュニケーションにおいて、感動詞を用いて反応すること

は必要不可欠であるとわかる。感動詞の使用や表情の変化も英語コミュニケーションの1つとして、リストにはないものの、ペアワークやグループワークなどのタイミングで指導する必要があるといえる。

2つ目に、rainy、snowyも頻出度が高く挙げられた。800語レベルのリストに含まれる語彙であるrain、snowの形容詞である。天気の違い方を学習する単元で「It's rainy.」という形で使うことが多いためである。しかし、それにもかかわらずリストにない語として分類されたのは、他の教材において、「How is the weather today?」という問いかけに対して、「It's sunny.」と答えるパターンが圧倒的に多いことが原因である。また、snowyは、地理的に雪が降る学校の子どもや生徒でなければめったに使用しない表現であることも、その重要度を下げた原因であろう。ただ、青森県の児童・生徒にとっては、非常に身近で日常的な表現である。このような点が、日本全国の小学生を対象としている、佐藤(2018)の語彙リストの改善点である。実際の指導場面においては、学校の地域性などの実態、児童・生徒の実情などを十分に考慮して語彙指導を行うことが必要である。またrainとrainy、snowとsnowyでは、使い方が違うということを、デジタル教材の英文や教師の発話を何度も聞かせることで、自然な理解を図ることが大切だと考えられる。

5.3 We Can! 1におけるカバー率

表3は、小学生のための受容語彙リストのWe Can! 1におけるカバー率を総語数と異なり語別に示したものである。

表3 小学生のための受容語彙リストのカバー率 (We Can! 1)

FILE	TOKEN	TOKEN% (累積)	TYPE	TYPE% (累積)
200LV	4947	64.21 (64.21)	148	17.92 (17.92)
400LV	897	11.64 (75.85)	127	15.38 (33.3)
600LV	796	10.33 (86.18)	135	16.34 (49.64)
800LV	284	3.69 (89.87)	78	9.44 (59.08)
NLV	780	10.12 (99.99)	338	40.92 (100)

Note: Token = 総語数、Type = 異なり語、NLV = リストにない語

表3に見られるように、カバー率は、それぞれ200語レベルでは、64.21%、400語レベルでは11.64%、600語レベルでは10.33%、800語レベルでは3.69%であり、リストに見られない語の割合は10.12%であるという、高学年用の教材であっても、これまでと同様

の傾向が観察された。これは、学習者が小学生のための受容語彙リストの200語レベルの語彙を習得していれば、教科書本文の6割以上の語彙を理解でき、リストにあるすべての語彙の意味を理解することができれば、約9割の語彙を理解することができるということである。

200語レベルから600語レベルの異なり語の種類が120語以上であることから、600語レベルまでの語彙が、We Can! 1の本文中に使用されていることが分かる。まずは、小学生のための受容語彙リストの200語レベルの語彙を十分に定着させ、その後600語レベルまで定着させることで教科書に出てくる語彙の約半数を理解することができるようになると考えられる。

各レベルにおいて繰り返し使用されている語彙の特徴として、日常生活での行動・行為を表現する動詞が挙げられる。自分の好きなものや嫌いなもの、できること、毎日することを扱った単元が多いためこのような特徴がみられると考えられる。また、頻度を表す語の使用も多くみられた。これは単元で、何をどのくらいの頻度で行うかという内容があるからだと考えられる。小学生は特に身近なものを題材としていることから、スポーツ名や教科名などの使用も多くみられた。

リストに見られない語彙の特徴として、wow, oh, uh-huhなどの相槌を含む感動詞が挙げられる。これらが多く使われている理由として、実際の会話の場面を意識した音声言語を使用しているためだと考えられる。その他には地名や観光地、料理の名前も多くみられるが、これらの言葉は外来語として耳にしたことがある語も多く、改めて明示的に導入する必要はあまりないと考えられる。自分のこととして誕生日についての内容があるため、序数の使用も多くみられた。morning, afternoon, eveningというあいさつによく用いられる語もリストには見られなかった。しかし、よく耳にする言葉であるため、それぞれの単語の意味というよりはgoodをつけて、挨拶ができる程度まで習熟されることが必要である。最後に、不規則動詞の変化形が挙げられる。上述の通りスクリーニングの際に規則動詞は原形としてカウント・分析したが、不規則変化の動詞は異なる単語としてカウントし分析を行った。小学校用のLet's Try!やWe Can!には、出現しないものの、中学校の教科書や絵本等の教材には高頻度で出てくるhas, won, got, said等の不規則変化の動詞をどのように扱うか、考える必要がある。

5.4 We Can! 2 におけるカバー率

表4は、小学生のための受容語彙リストの *We Can!* 2 におけるカバー率を総語数と異なり語別に示したものである。

表4 小学生のための受容語彙リストのカバー率 (*We Can!* 2)

FILE	TOKEN	TOKEN% (累積)	TYPE	TYPE% (累積)
200LV	4550	64.27 (64.27)	141	20.43 (20.43)
400LV	763	10.78 (75.05)	111	16.09 (36.52)
600LV	824	11.64 (86.69)	124	17.97 (54.49)
800LV	243	3.43 (90.12)	60	8.7 (63.19)
NLV	699	9.87 (100)	254	36.81 (100)

Note: Token = 総語数、Type = 異なり語、NLV = リストにない語

これまで分析してきた教材と同様に、*We Can!* 2 の本文のカバー率はそれぞれ200語レベルでは64.27%、400語レベルでは10.78%、600語レベルでは11.64%、800語レベルでは3.43%、リストに見られない語では9.87%であった。このことから、学習者が小学生のための受容語彙リストの200語レベルの語彙を習得していれば、小学校6年生用の教科書 *We Can!* 2 のおよそ6割の語彙を理解でき、リストにある全ての語彙の意味を理解することができれば、9割以上の語彙を理解することができるということがわかる。また、上記のほかの教材と同様に200語レベルの語彙のカバー率が64.27%であり、それ以上のレベルの語彙のカバー率は、10.78%~3.43%と頭打ちになっていることがわかる。さらに200語レベルの異なり語の種類が141語であることから、この141種類の語彙が、*We Can!* 2 の本文中に繰り返し使用されていることが分かる。

リストに見られない語の特徴として、memory、vacation、Olympic、future、Paralympic などといった題材語が多く見られた。そのほかとしては、went、ate などといった動詞の過去形の不規則変化形である。小学校外国語の授業では動詞の過去形が定型表現として扱われるものの、過去形を動詞の変化形という形の文法項目として明示的な言語形式の指導を行わないことが語彙リスト外にある理由である。次に、delicious、exciting、といった日常でよく使われるような形容詞が多く見られた。小学校においても、日常で普段から使うような形容詞を英語で表現することが必要であることがわかる。

5.5 中学生用検定教科書：TOTAL ENGLISH 1 (学校図書) におけるカバー率

学習指導要領に記されているような、コミュニケーション踏力を育成するためには、校種間の連携が不可欠である。本研究では、小学校と中学校の連携を、語彙の側面から教材を分析することによって検討したい。表5は、小学生を対象とした、佐藤 (2018) の語彙リストの中学生用検定教科書である *TOTAL ENGLISH 1* (学校図書) におけるカバー率を示したものである。

表5 小学生のための受容語彙リストのカバー率 (*TOTAL ENGLISH 1*)

FILE	TOKEN	TOKEN% (累積)	TYPE	TYPE% (累積)
200LV	891	62.83 (62.83)	106	27.75 (27.75)
400LV	179	12.62 (75.45)	66	17.28 (45.03)
600LV	137	9.66 (85.11)	66	17.28 (62.31)
800LV	74	5.22 (90.33)	47	12.3 (74.61)
NLV	13	9.66 (100)	97	25.39 (100)

Note: Token = 総語数、Type = 異なり語、NLV = リストにない語

表5に見られるように、カバー率は、それぞれ200語レベルでは、62.83%、400語レベルでは12.62%、600語レベルでは9.66%、800語レベルでは5.22%であり、リストに見られない語の割合は9.66%であった。これは、学習者が小学生のための受容語彙リストの200語レベルの語彙を習得していれば、教科書本文の半分以上の語彙を理解でき、リストにあるすべての語彙の意味を理解することができれば、9割以上の語彙を理解することができるということである。つまり、小学校で扱われると考える、佐藤 (2018) の800語の語彙で、中学生用の検定教科書のほとんどをカバーしているとすることができる。ただし、小学生は主に「話す・聞く」という音声言語を中心に学習してきているので、このカバー率の高さがそのまま教科書の本文を読めることにはつながらないことに留意しながら結果を分析することが必要である。

また、上記のほかの教材と同様に200語レベルの語彙のカバー率が62.83%であり、それ以上のレベルの語彙のカバー率は、12.62%~5.22%と頭打ちになっていることがわかる。さらに200語レベルの異なり語の種類が106語であることから、この106種類の語彙が、*TOTAL ENGLISH 1* の本文中に繰り返し使用されていることが分かる。以上から、まずは、小学校段階で、小学生のための受容語彙リストの200語レベルの語彙

を音声言語として十分に定着させ、それを踏まえて中学校でそれらを読んだり書いたりする活動につなげることが、スムーズな小中連携という点から考えても非常に重要であることが分かる。

リストに見られない語彙の特徴として、Thanksgiving Day、Christmas、turkey など、その多くが教科書の題材語であり、主に行事に関する語が多いことが分かる。一方で、それ以外でリストに見られない語彙としては以下のようなものが見られる。まず、excited、interested、surprised、など動詞の過去分詞形が気持ちや心情を表す形容詞として使われているものが多くみられる。小学校外国語においても、自分の考えや気持ちを表現したりする機会があるように考えられる。しかしこれらの単語は、be excited at、be interested in、be surprised at のように be 動詞や前置詞とともに使われることが多いため、小学生にとっては高度なものである。それが動詞の過去分詞形で形容詞として扱われているものが小学校の語彙リストではカバーしきれない要因のひとつと考えることもできるであろう。

次に、これまでと同様 wow、hmm など、感動詞が挙げられる。このような感動詞やフィラーは実際の言語使用場面では必ずでてくるため、オーセンティシティという面から考えると、重要な役割を果たしていると考えられる。小学生が聞いてわかる語彙のリストという観点から、佐藤（2018）ではリストに含めなかった。リストの改定にあたり、感動詞やフィラーなどをどのような位置づけにするのか検討することが必要である。

最後に、braille、sanctuary、traditional、national、など社会性のある語彙が見られる。例えば braille は、点字を扱ったレッスンで出てくるが、目の不自由な人にとってはこれが英語や日本語と同じような、1つの言語であり、「バリアフリー」という社会的トピックを取り上げている。このように、中学校段階では、トピックの幅が広がった、社会性のある題材、日本の伝統を英語で理解するという語彙が使用されることが分かる。

5.6 中学生用検定教科書：NEW CROWN ENGLISH COURSE 1（三省堂）におけるカバー率

表6は、小学生のための受容語彙リストのNEW CROWN ENGLISH COURSE 1（三省堂）におけるカバー率を総語数と異なり語別に示したものである。

表6 小学生のための受容語彙リストのカバー率
(NEW CROWN ENGLISH COURSE 1)

FILE	TOKEN	TOKEN% (累積)	TYPE	TYPE% (累積)
200LV	1,433	62.96 (62.96)	150	27.78 (27.78)
400LV	263	11.56 (74.52)	86	15.93 (43.71)
600LV	253	11.12 (85.64)	104	19.26 (62.97)
800LV	106	4.66 (90.30)	66	12.22 (75.19)
NLV	221	9.71 (100)	134	24.81 (100)

Note: Token = 総語数、Type = 異なり語、NLV = リストにない語

表6に見られるように、カバー率は、それぞれ200語レベルでは、62.96%、400語レベルでは11.56%、600語レベルでは11.12%、800語レベルでは4.66%であり、リストに見られない語の割合は9.71%であった。これは、学習者が小学生のための受容語彙リストの200語レベルの語彙を習得していれば、教科書本文の半分以上の語彙を理解でき、リストにあるすべての語彙の意味を理解することができれば、9割以上の語彙を理解することができるというこれまでと類似した結果となった。

また、上記のほかの教材と同様に200語レベルの語彙のカバー率が62.96%であり、それ以上のレベルの語彙のカバー率は、11.56%~4.66%と頭打ちになっていることがわかる。さらに200語レベルの異なり語の種類が150語であることから、この150種類の語彙が、New Crown 1の本文中に繰り返し使用されていることが分かる。

リストに見られない語彙の特徴として、mask、poisonous、tug of war など、その多くが教科書の題材語であることが分かる。一方で、それ以外でリストに見られない語彙としては以下のようなものが見られる。まず、did、got、ran、took など動詞の過去形が多くみられる。小学校外国語で、過去形を扱うレッスンあるものの、そこで導入される動詞は、went や ate などごく限定的である。一方、中学校では、幅広い動詞の過去形が導入されることとなる。動詞の過去形が小学校の語彙リストではカバーしきれない要因のひとつとすることができるであろう。

また、wheelchair、important、culture、ancestor、nature など、TOTAL ENGLISH 1（学校図書）と語彙そのものは異なるものの、より社会的な内容を表現する際に必要なものという点では同様の結果となった。例えば、wheelchair は、パラリンピックの競技を題材としたレッスンで、車いすバスケットボールのルールを

説明するという英文で使用されるものである。また、ancestor は、日本の文化として、「送り火」と「迎え火」を紹介する英文で使用されているものである。このように、中学校段階では、身の回りの身近な内容だけにとどまらず、社会的な題材や、日本の伝統を英語で紹介するためなど、より高度な語彙が使用されることが分かる。

6 まとめと教育的示唆

本研究は、小学校の外国語の授業において、指導すべき語彙を、使用されている教材のカバー率の観点から量的に明らかにすることを目標としたものである。小学校で主たる教材として使用されている中学年向けの *Let's Try! 1, Let's Try! 2*, 高学年向けの *We Can! 1, We Can! 2* と中学校1年生の検定教科書である *TOTAL ENGLISH 1* (学校図書) と *NEW CROWN ENGLISH COURSE 1* (三省堂) の本文および教師用指導書に見られる、教師や児童の発話例などをテキストデータ化し、*AntWordProfiler* を使用して、佐藤 (2018) の小学生のための受容語彙リストの200語レベル、400語レベル、600語レベル、800語レベルの語彙が、それぞれの教材をどれくらいカバーしているのかを分析した。

その結果、以下の点が明らかになった。まずは、200語から800語にかけて、それぞれのレベルの語彙が、教材をカバーする割合は、どの教材においても200語レベルではおよそ60%~70%、400語レベルでは10%程度、600語レベルでは3%~5%、800語レベルでは1%程度と、小学校中学年用の教材から中学校1年生用の教材を通して、類似した数値を示した。特に、200語レベルに含まれる語彙は、どの教材においても6割程度をカバーする非常に頻度の高い語彙である。まずは、スモールトークやインタビューなどの活動を通して、この語彙に十分に慣れ親しませ、聞いて意味が分かる語彙として習熟させることが重要であると考えられる。この200語を聞いて理解することができれば、小学校段階では、授業内で触れる教材の語彙の半分以上を理解することにつながる。中学校段階では、それに加えて、それらの語彙を読んで理解することが求められることになるが、教師の方で、オーラルイントロダクションなど、まず音声で概要をインプットし、その後、文字の指導に移行するなどの適切な指導過程を踏めば、小学校の語彙の指導を生かし、スムーズで効率的な語彙指導を展開することにつながるであろう。

2つ目として、それぞれの教材における、リストに含まれている高頻度語、反対にリストにはないが高頻度で使用されている語彙の分析から、小中それぞれの教材に見られる語彙の使用に関する特徴が明らかになった。小学校においては、感動詞やフィラー、Olympic などの題材語があげられる。中学校では、played や watched のような規則変化の過去形、plays や watches など三人称単数の動詞の変化形など小学校では扱われない文型に関するもの、社会的な題材に関する語彙などがその特徴である。

ここから得られる小中連携した語彙指導に対する教育的示唆としては、まずは、一般的に重要であると考えられる、佐藤 (2018) の『小学生のための受容語彙リスト』に見られる語彙を頻度の高い準備に意識的の授業の取り入れるなどをして、慣れ親しませることから、聞いてわかるよう指導を行う。これは、小中を通して、さらには、生涯にわたる英語使用の核となる語彙である。その上で、児童・生徒の実態や、学校の環境などから、個別に必要であろうと判断される語彙を追加していくことが重要なのではないだろうか。

また、このような調査の結果を受けて、語彙リストそのものを改定していくこともまた重要である。リストには含まれないが、小学生や中学生にとっては重要であると考えられる語彙をリストに含め、反対にリストにはあるものの、日本の学校現場の実態には即さない語彙を削除することを繰り返すことで、より児童生徒の実態、そして指導されている教師の直観に近いリストを作り上げていくことが今後の課題である。

このような取り組みが、小中学校の外国語の授業の教材研究や選定、指導の一助となることを期待したい。

注及び文献

- 投野由紀夫 (2019), 「「受容」と「発信」：こう考える・こう具現化する」『英語教育』第67巻, 10-12.
- 佐治量哉・佐伯泰子 (2012), 「小学校6年生の語彙理解度と単語親密性に関する考察」『小学校英語教育学会誌』第12号, 115-124.
- 佐藤 (2018) 「小学生のための受容語彙リストの開発」『JES Journal』第18巻, 36-51.
- 長谷川修治, 中條清美, 西垣知佳子 (2010) 「日本の英語教育における語彙指導の問題を考える」『植草学園大学研究紀要』第2巻, 21-29.
- 眞野美穂, 鈴江涼子 (2018) 「中学校英語検定教科書における動詞の出現頻度調査：現状と課題」『鳴門教育大学研究紀要』第33巻, 195-308.

三浦省五（1984）「中学校英語教科書の語彙に関する研究」
『中国地区英語教育学会 研究紀要』No.14, 128-129.

(2019. 8. 6 受理)